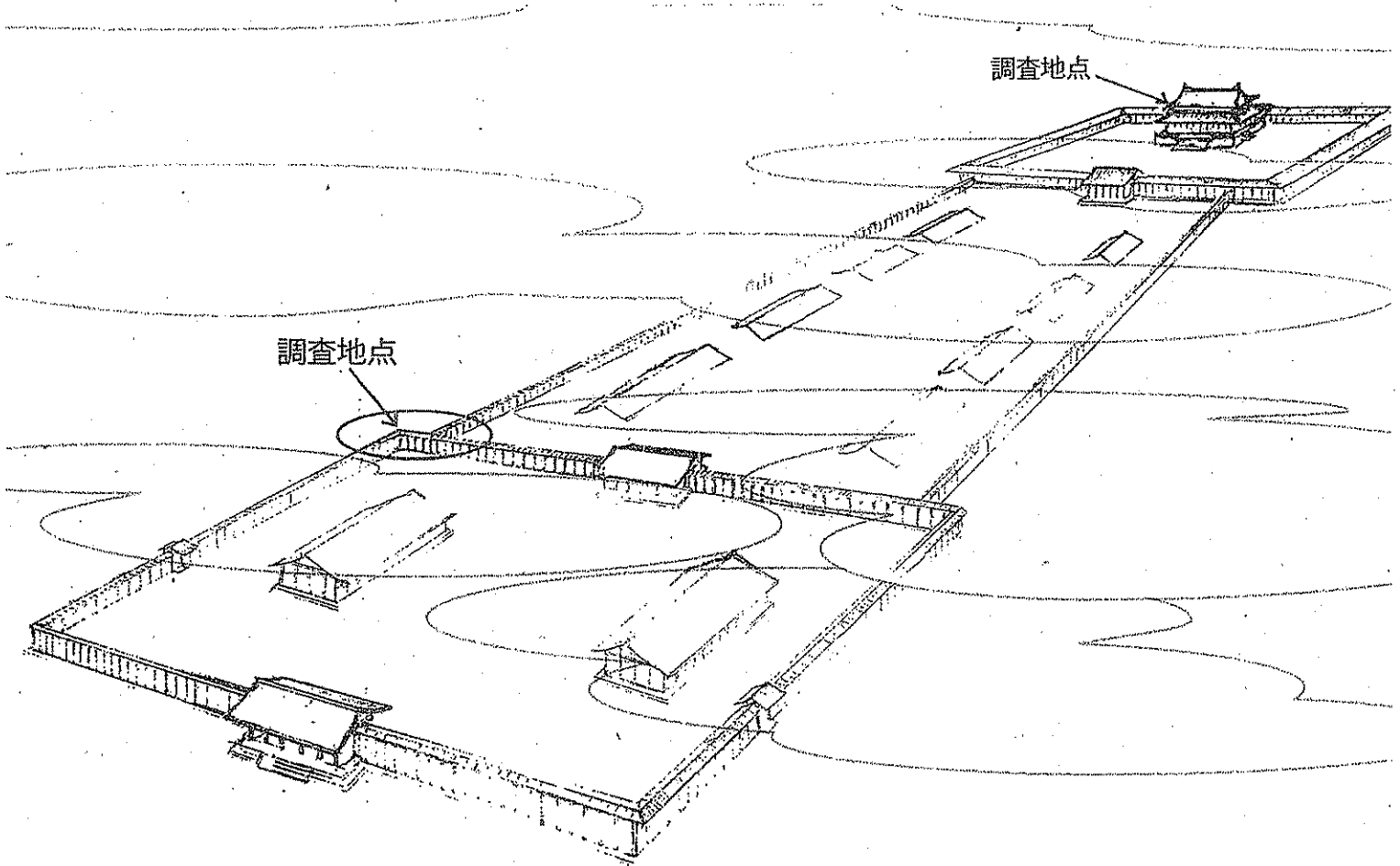


平成21年度

くにきゅうあと

恭仁宮跡発掘調査

現地説明会資料



恭仁宮跡推定図（南東から望む）

京都府教育委員会

平成21年11月21日（土）

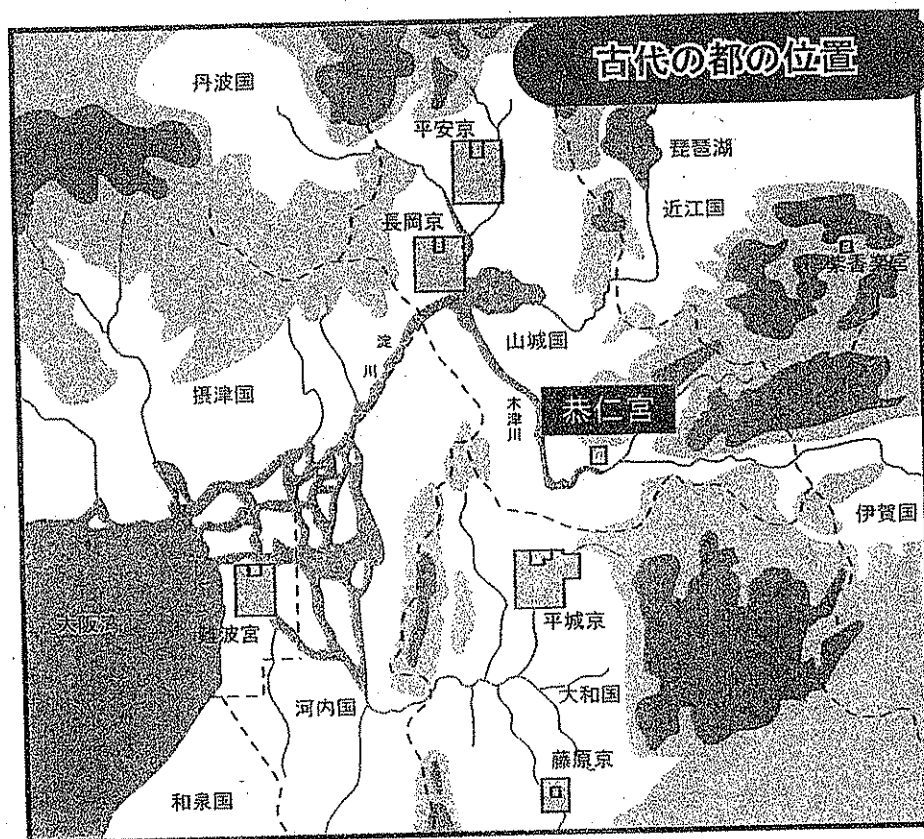
はじめに

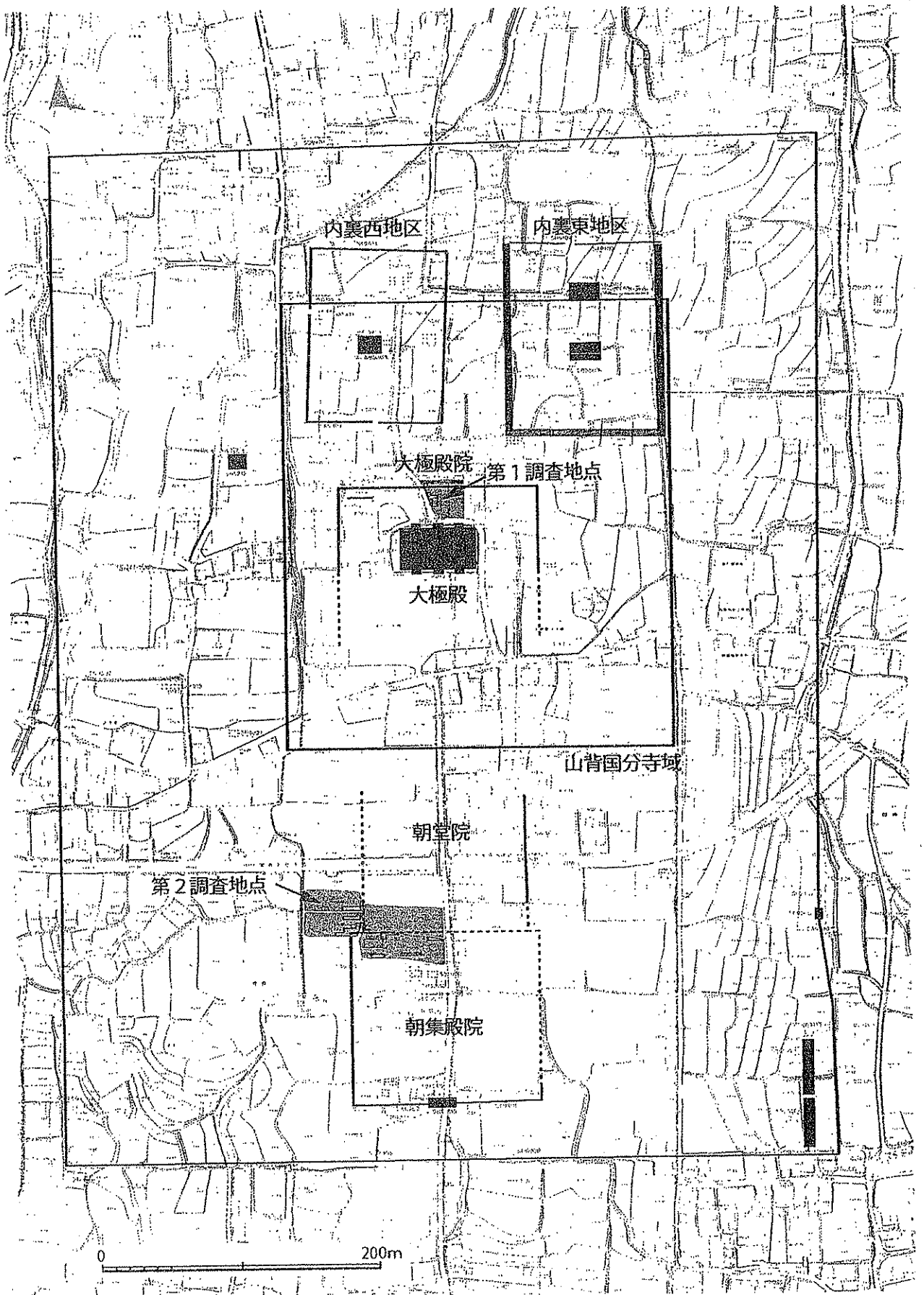
京都府内には、古代に平安京、長岡京、恭仁京という3つの都が造られました。京都市の中心部に造られた平安京は、延暦13(794)年から明治元(1868)年に首都が東京に遷されるまでその役割を果たした、いわゆる「千年の都」です。また、平安京に都が遷される直前の延暦3(784)年からの10年間は、現在の向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にわたって造られた長岡京で政務が行われました。

そして、3つの都の中では最も古く、今からおよそ1270年前の天平12(740)年に聖武天皇により、現在の木津川市加茂町、山城町、木津町にわたる範囲に造られたのが「恭仁京」、その中心となるのが加茂町瓶原の地に造られた「恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏、政治や国家の儀式などが行われた大極殿や朝堂院、さらには役人達が仕事を行った役所(官衙)など、国の中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする木津川市の一帯は、短期間ながら国の首都となっていたのです。

しかし、そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大坂の難波宮へと移され、さらには平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は、短い役目を終えた後、天平18(746)年に山城(山背)国分寺へと造り替えられました。





第1図 恭仁宮全体図 (S=1/4,000・アミカケが調査地点)

※ ■ はこれまでに見つかっている主な建物跡

これまでの調査成果

昭和48年度以降、京都府教育委員会や加茂町（現木津川市）教育委員会が実施している発掘調査によって、宮の範囲、大極殿や内裏などの宮内の主要な施設が見つかり、恭仁宮の実態が少しずつ分かってきました（第1図）。

恭仁宮は東西に約560m、南北に約750mの大きさを設計され、その周囲は高い土塀（築地塀）で囲まれていました。

大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ1m以上の大きな土壇の上に築かれた東西45m、南北20mもある大きな建物でした。朱塗りの太い柱を大きな石材（礎石）の上に建てた礎石建物で、北西と南西の隅に置かれた礎石は、当時のまま動かされていないことが調査によって分かりました。

大極殿院を取り囲む回廊は、西北隅付近を確認しています。回廊は築地を中央に築き、その両側を通路にした「複廊」と呼ばれる立派な形式のものです。奈良時代のことを記録した『続日本紀』という歴史書には、平城京から恭仁京へ都が遷された際、平城宮の大極殿とともに、その周囲に設けられていた「歩廊」を恭仁宮へ移築したことが記録されています。発掘調査の結果、恭仁宮の大極殿跡や築地回廊が、平城宮と同じ規模で造られていることが確認され、『続日本紀』の記述が裏付けられました。

大極殿の北側には内裏が設けられていました。恭仁宮跡では、内裏に相当する施設が東西に2つ並んで設けられていたことを確認しています。現在のところ、この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」、「内裏東地区」呼んでいますが、このような施設の配置は、恭仁宮だけの独自のもので、どちらが天皇が住まいした内裏なのかは、はっきりしていません。「内裏西地区」は周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれた、東西約98m、南北約128mの大きさです。「内裏東地区」は、北辺が板塀（掘立柱塀）で、残る東、西、南辺は土塀（築地塀）で囲まれた、東西約109m、南北約139mの大きさで、「内裏西地区」より一回り大きく造られていることが分かっています。

朝堂院・朝集殿院では、これまでの調査で、周囲を区画する板塀（掘立柱塀）を確認していたほか、南辺に造られていた門（朝集殿院南門）も見つかっています。

平成21年度の調査で分かったこと

○第1調査地点（第2、3図）

「大極殿院地区」では、これまでの調査で、大極殿と大極殿院回廊が見つかっています。恭仁宮と同じ頃に造られた平城宮や難波宮では、大極殿の北側に天皇が内裏から大極殿へ出御する際の控えの場としての「大極殿院後殿」と呼ばれる建物が設けられていたことが確認されています。恭仁宮にも大極殿院後殿が造られていたと想像されますが、その存在はこれまで確認できていませんでした。このため、昨年度（平成20年度）から、大極殿の北側で、大極殿院後殿の存在を確認するための調査を行っています。

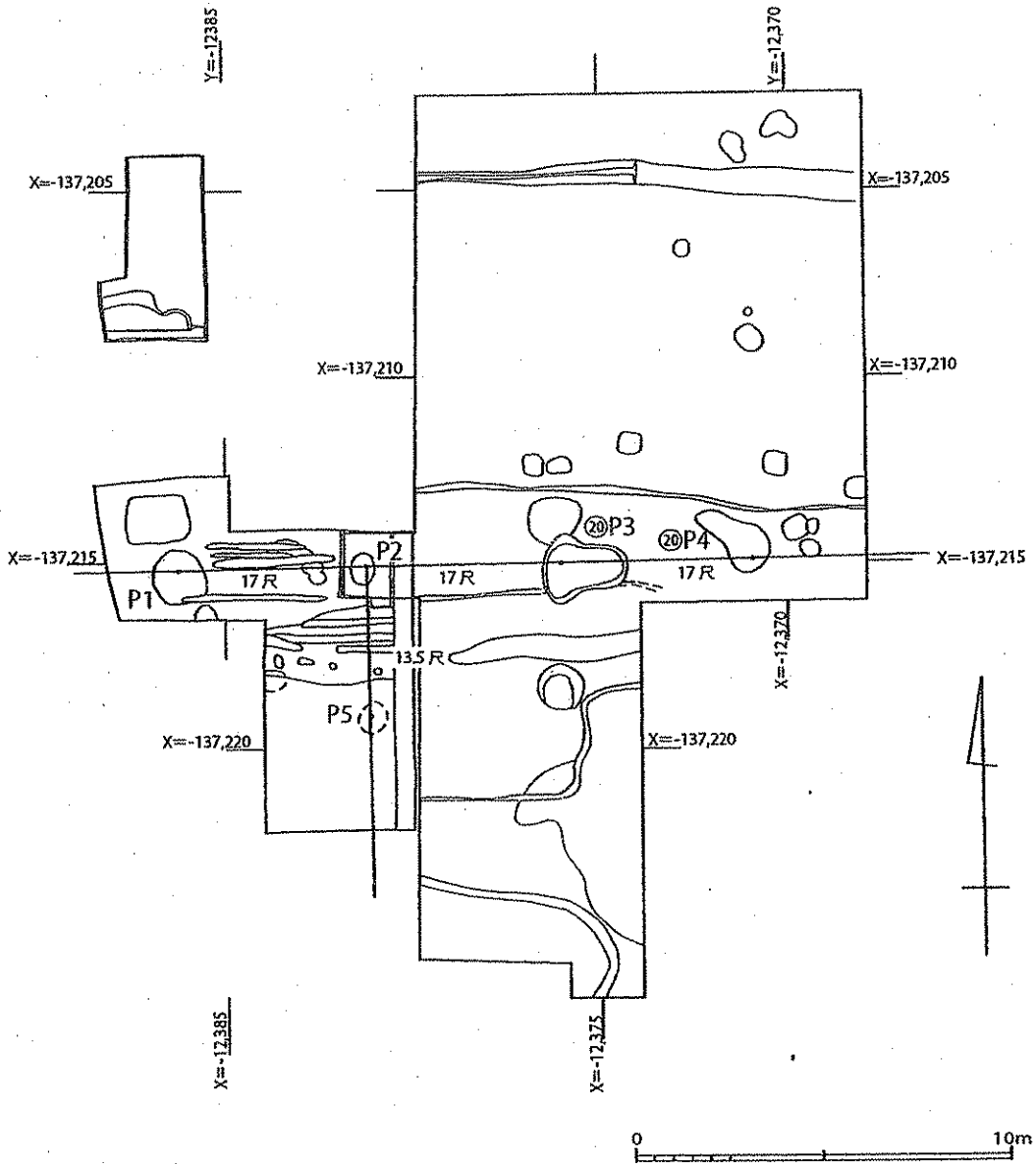
昨年度の調査では、今回の調査地の東側で、約5.1m（当時の物差しは1尺＝約0.3mですのでおよそ17尺にあたります）の間隔で東西に並ぶ穴を3箇所確認しました。礎石を据え付けるための穴ではないかと考えられたため、大極殿院後殿の大きな手がかりと判断しました。そして、今年度は、その西側を調査して、同じような穴が建物の痕跡を示すように見つかるかどうかの確認を行いました。

調査の結果、昨年度に確認した最も西側の穴から、さらに5.1m西へ離れたところで、同じように礎石の据え付け穴と思われる穴（第2図のP1）を1基確認することができ、これらが礎石を据え付けるための穴であった可能性が一層高まりました。また、P2の南側に約3.9m離れたところで別の穴（P5）を確認しました。P2を確認した位置は、大極殿の中央付近の北側に相当しており、大極殿院後殿が存在したとすれば、大極殿と大極殿院後院とをつなぐ軒廊こんろうが設けられた場所に相当しており、P5は軒廊に伴う礎石の据え付け穴の可能性も考えられます。

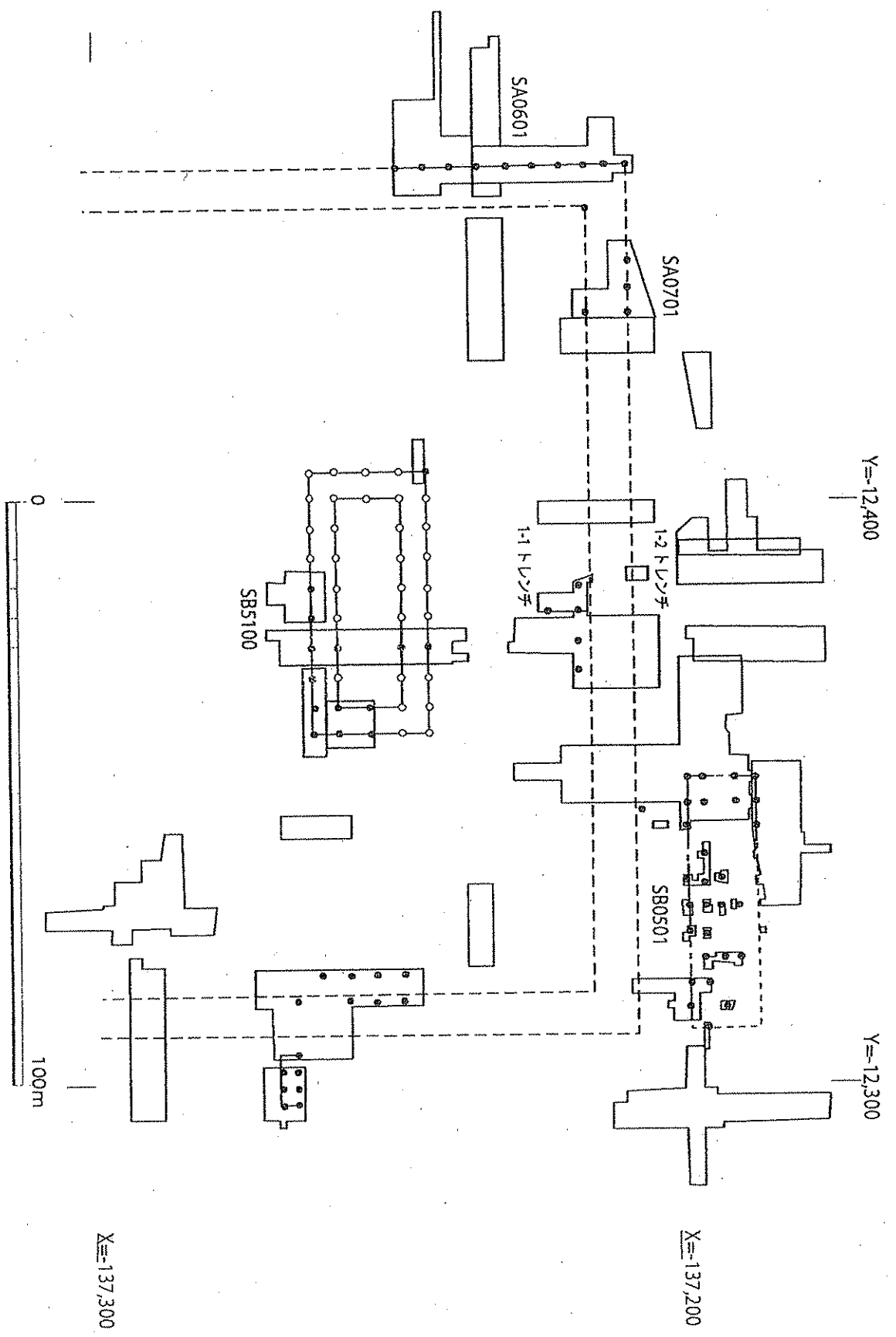
ただ、残念ながら、調査範囲が狭いことや、周辺の遺構が後の時代の耕作などで失われてしまっているため、これらがはっきりと建物の痕跡を示すように並んでいる状況は確認できず、大極殿院後殿の痕跡（礎石据え付け穴）との確証を得るは至らなかったと判断しています。今後は、大極殿院後殿の存在の確認のため、さらに周辺部での調査を進めていく予定です。

○第2調査地点（第4、5図）

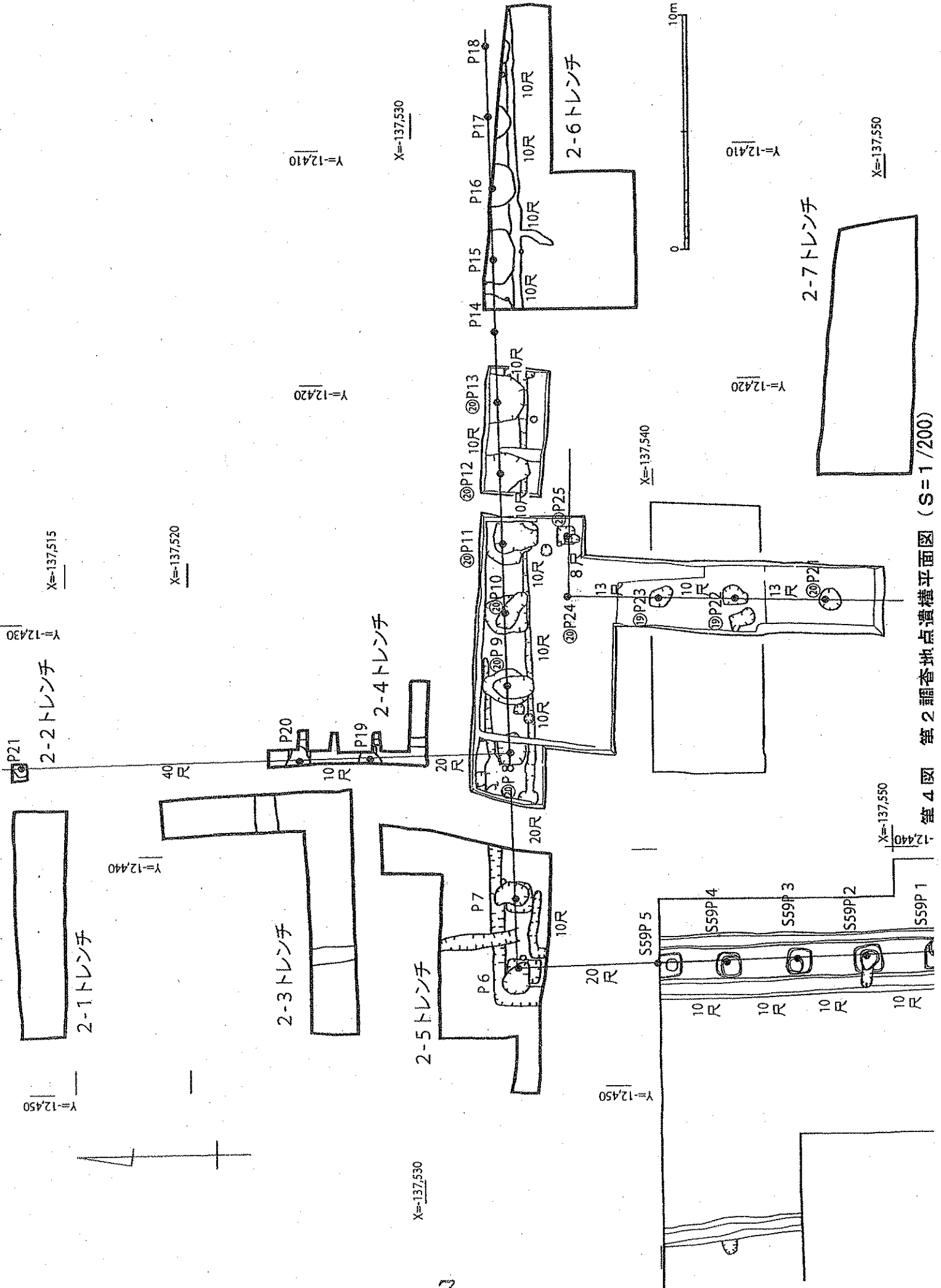
「朝堂院地区」では、これまで見つかっていなかった「朝堂」の建物を見つげるための調査を行いました。



第2図 第1調査地点遺構平面図 (S=1/200)



第3図 大極殿院地区検出遺構配置図 (S=1/1,000)



第4図 第2調査地点遺構平面図 (S=1/200)

昨年度の調査では、東西に約3m(10尺)間隔で並ぶ6基の柱穴を確認しました。柱穴は長径が1.5~1.7mの楕円形で、それまでに確認していた朝堂院の区画塀のものより大きかったことなどから、これが高位の役人が出仕する建物である「朝堂」の一部となる可能性があると考えました。このため、今年度は、朝堂と考えられる建物の全体像を明らかにすることを目的に、その周辺部分で調査を実施しました。

調査の結果、東西に並ぶ柱穴列は、東側へさらに5間以上(1間は約3m=15m以上)にわたって続いていることが分かりました(第2-6トレンチ)。また、西側へは昨年度調査の西端の柱からさらに3間分(約9m)延びて、過去の調査で確認されていた朝堂院の西辺を区画する柵列S A5901の延長部につながる事が判明しました。このため、昨年度に建物の一部と判断した柱列は、建物跡にはならず、東西に延びる区画塀の一部になると判断されました。

これまでの朝堂院での調査成果と、今回確認した以上の成果を総合すると、この柱列は朝堂院と朝集殿院^{ちようしゅうてんいん}の境をなすものと考えられます。平城宮や難波宮では、朝堂院の南側に役人の控えの場としての朝集殿院が設けられています。恭仁宮では、これまでの調査で、朝堂院の東、西、南の各辺を区画する塀跡を確認していますが、このうち南辺から約78m(約260尺)北へいったところで、東西に5間分続く塀跡と小規模な東西棟建物がみつかっており、これが朝堂院と朝集殿院とを区画する施設と考えていました。しかし、他の宮跡の事例に比べてこれらが小規模なことや、今回の調査成果を総合すると、今回確認した塀が朝堂院と朝集殿院とを区画する本来の施設であったと考えられます。この成果により、これまで南北約78mの規模と想定されてきた朝集殿院が、南北に47m伸びて、南北125m、東西134mの規模であることが確定しました。

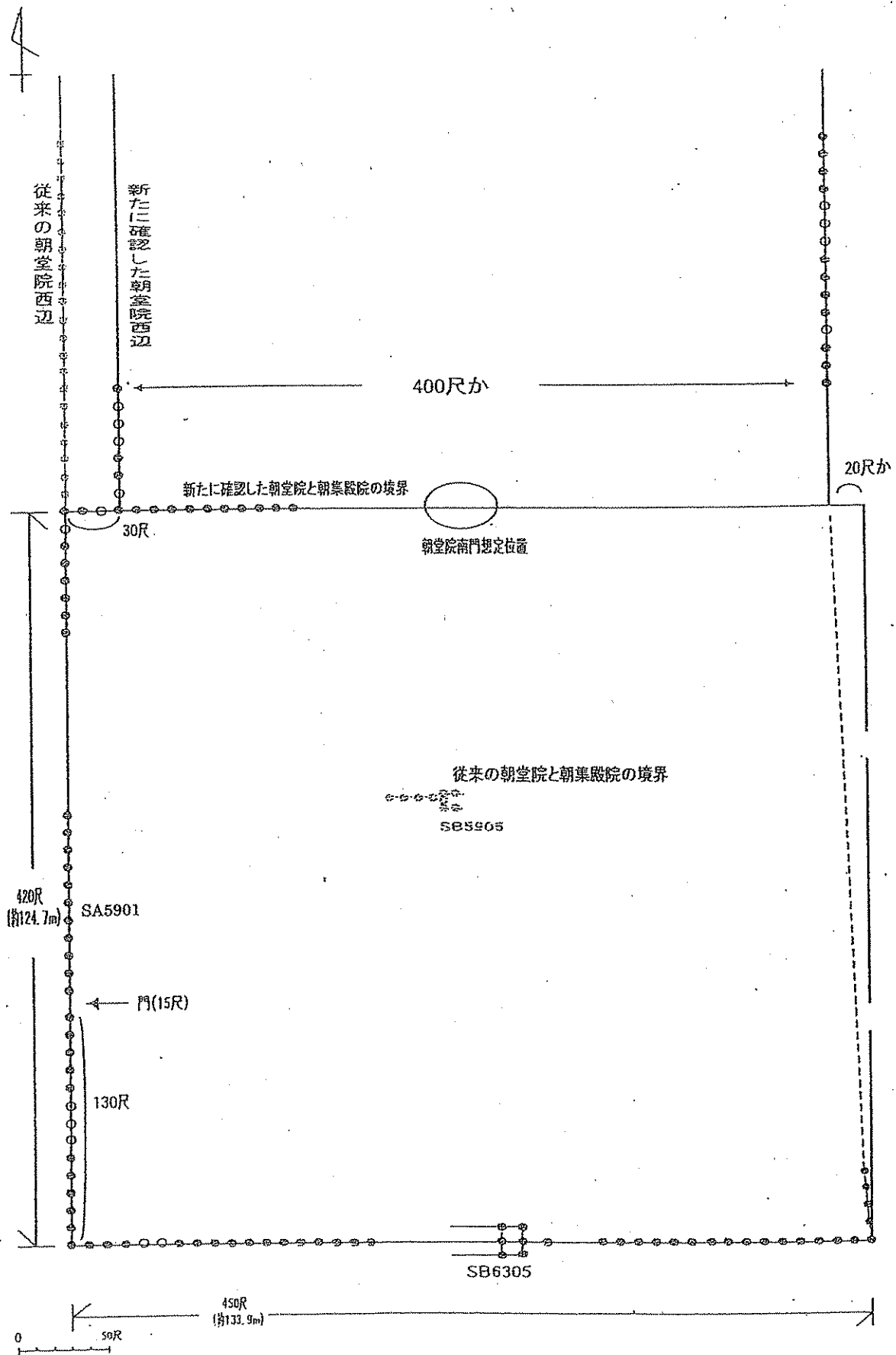
また、調査では、新たに確認した朝集殿院の西北隅から東へ3間(30尺=9m)の位置にある柱穴(P8)から北側へ分岐して延びる柱列も確認しています。この南北方向の柱列は、朝集殿院の北側に広がる朝堂院の西辺を区画する柱列と考えられます。このことから、朝堂院は、朝集殿院に比べて東西幅がやや狭くなっていたことも明らかになりました。

まとめ

今年度の調査では、大極殿院後殿を確認する上での手がかりを得るとともに、朝堂院と朝集殿院の境界をなす塀跡を確認することができました。

大極殿院後殿の確認については、昨年度に続き、周辺の耕作などで失われた部分が多くありますが、その存在の手がかりとなる柱穴が見つかったことは大きな成果と言えます。

朝堂院での調査では、当初に想定した朝堂建物の全体像の解明には至りませんでした。これまで推測の域をでなかった朝集殿院の規模や朝堂院の南辺を確定するという恭仁宮の構造を考える上で大変重要な成果を得ることができました。朝堂院については、これまでの想定よりも南北長が短くなる可能性が高まり、朝堂の数や配置、大極殿院との接続部分の状況など、未解明な点が多く残されています。しかし、宮内全体からみれば、主要施設の配置がほぼ確定できたことになり、奈良時代に造営された他の宮跡との比較検討が飛躍的に進められ、恭仁宮の歴史的意義が一層解明されるものと期待されます。



第5図 朝集殿院・朝堂院地区遺構検出模式図

**** 又 七 ****

最後になりましたが、今回の調査に際し、調査に参加していただいた皆さん、各方面からご指導、ご協力いただいた方々に、深く感謝いたします。
